

現代日本小説大系

序巻



日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

序  
卷

河出書房版

現代日本小說大系 序卷

昭和二十七年三月十日  
初版印刷  
昭和二十七年三月十五日  
初版發行

定價 貳百參拾圓  
地方定價 貳百四拾圓

代著者

坪内逍遙

發行者

河出孝雄

編集者

片岡良一

印刷者

小田茂作



發行所

東京都千代田區  
神田小川町三ノ八  
株式會社

河出書房

會員番號 A 一一一〇一四番  
電話 神田 (25) 三二七四番

東京日本印刷株式會社印刷

屬邦を救て斯軍慕知を侵す……………二七九

第十二回 羽箭地峽に白馬の將を射る  
壯士を愛して老王廣を釋す……………二八三

第十三回 小捷に狃て齊人隙を同盟國に啓く  
兵戈に苦て諸國大平和の議を容る……………二八六

第十四回 列國の英雄一堂に會す  
齊使大會に舊典を爭ふ……………二九五

第十五回 斯人大に同盟列國の兵を擧ぐ  
野戰を決して齊人存亡を賭す……………三〇四

第十六回 殘夜帳中に冤鬼、夢に入る  
春風原頭に古墳、祭を享く……………三〇四

第十七回 列國の大兵大に降具の野に戰ふ……………三〇九

第十八回 齊人禮を備へて屍を送る  
舊法一日、眼を斯國に閉つ……………三一三

第十九回 覇業地に墜ち南邊紛擾す  
志士義を唱て柳珂勃興す……………三二八

第二十回 舊怨を報して大兵、都を圍む  
奇才を嘆して老將、兵を旋す……………三三三

第廿一回 聯邦柳珂に公都を築く……………三三三

第六回 詐りは以て非を飾るに足る

善惡の差別もわかうどの惡所通ひ……………元

第七回 賢と不肖とを問はず老と少とを論ぜず

たぶらかしざしきの客物語……………四三

第八回 雨を凌ぐ人力車はめぐり／＼て

小町田が田の次に逢ふ再度の緒……………五〇

第九回 一得あれば一失あり

一我意あれば一理もある書生の演説……………五七

第十回 生兵法大きな間違をしてかして

身方をぶちのめす書生の腕立……………六四

第十一回 つきせぬ縁日のせうろあるきに

小町田はからずも舊知己にあふ……………七一

第十二回 學校から追出される親父の資送は絶える

どこでたつ岡町に懶惰生の翻譯三昧……………七八

第十三回 心の宵闇に

有漏路無漏路を踏迷ふ男女の密談……………八二

第十四回 近眼遠からず

駒込の温泉に再度の間違……………八五

第十五回 舊人を尋める新聞紙の廣告に

# 矢野龍溪

## 齊武名士經國美談

### 前篇

#### 第一回 賢王賢士濟民の功業を立つ

一群の童子等史談に感激す……………一三七

顔島ゆくりなく由縁の人を知る……………九一

#### 第十六回 黒紹の薄羽織の媒介にて

薄からぬ縁因をしる守山と倉瀬の面談……………九五

#### 第十七回 文意を文字通りにみや賀の兄弟

そゝろにコレラ病の報知におどろく……………九九

#### 第十八回 春ならねども梅園町に心の花の開けそむる

親と女との不思議の再會……………一〇六

#### 第十九回 全篇總て二十回脚色もやう／＼に

塾部屋へ倉瀬の急報……………一二七

第二十回 大團圓……………一二九

第二回 希臘列國の形勢……………一四〇

第三回 奸黨詭計を用ゐて民政を覆す

諸名士難を脱して阿善に走る……………一四四

第四回 兵威を弄て公會を解散す

大會堂に諸名士縛に就く……………一五〇

第五回 江上の漁舟夜恩人を救ふ

政論場に壯士國難を訴ふ……………一五三

第六回 英雄回復の援兵を乞ふ

儉安の官吏應援を沮む……………一五八

第七回 太子妖魔を斫て民害を除く

奸黨刺客を放て名士を殺す……………一六三

第八回 列國の法官大に齊武に會合す

名士正理を論じて法官を挫く……………一六七

第九回 美人暗に英雄を救ふ

狙撃を避て名士離散す……………一七二

第十回 暴威を逞くして覇國阿善に迫る

人民を激勵して論士舊誼に報ゆ……………一七五

第十一回 山中の隱士禍福を説く

孤村の月夜主従再會す……………一七九

## 第十二回 小憤の爲に豪傑身を誤る

諸名士境上に囚徒を奪ふ……………一八四

## 第十三回 賢士獄中に在て理學を修む

……………一八八

## 第十四回 名士身を屈め回復を謀る

壯士慷慨して變節を詰る……………一九二

## 第十五回 賢士治亂を説て親友を諫む

英雄機を察して大計を定む……………一九五

## 第十六回 諸名士死を決して國都に歸る

……………一九八

## 第十七回 人民の爲に天意小价を遅延す

奸人急使を馳せて密謀を報す……………二〇三

## 第十八回 十二の婦人宴席に入る

……………二〇六

## 第十九回 賢將古廟に義兵を部署す

人民會堂に回復を布告す……………二一一

## 第二十回 功を賞し勞に報て國內清平に歸す

覇國大に同盟軍を擧て齊武を侵す……………二一六

## 後篇

## 第一回 齊人兵を發して二險を扼守す

名士使を奉じて佳人に再會す……………三九



第二回 阿善國都に暴民紀綱を紊る

公會堂上に阿慈頓節に死す……………二五

第三回 平昆守りを失ひ齊兵夜奔る

亂民都を焚き淑女難に遭ふ……………二四二

第四回 孤城圍を受けて糧食に困む

二商弗拉太に斯將を説く……………二四六

第五回 古柏村に將軍隱士を訪ふ

涇比川に牧童短笛を吹く……………二五三

第六回 三士大に靖難の義を唱ふ

義勇兵街上に亂民と戦ふ……………二五八

第七回 援軍城外に死戦の陣を布く

二國平羅に同盟の約を結ぶ……………二六三

第八回 帝慈溪に健兒重圍を斫る

紅平湖に英雄奇士に逢ふ……………二六八

第九回 大志を語て少年援助を請ふ

往事を説て慈母二女を戒む……………二七三

第十回 戰略を定て馬軍騎將を斬る

東海を争て艦隊能季に戦ふ……………二七五

第十一回 薄命を憐て二名士婚を定む

齊人米世に廢國を興す……………三八

第廿二回 賢將國を愛して典法を犯す……………

名士請を容れて北部を鎮す……………三三

第廿三回 太子、兵を督して無涙の捷を得……………

賤卒、難を聞て總督の印を帶ぶ……………三七

第廿四回 英雄誤て毒手に落つ……………

賢將奮て親友を救ふ……………四〇

第廿五回 縱横、計成て覇業定まる……………

内政治る後ち國威振ふ……………四三

解 說 (片岡良一)……………四五

坪內逍遙

讀  
三  
款

當世書生氣質

## は し が き

英のクレイク翁アリボン翁などは批評家の尤物株なり。古今の小説家の著作を評して勝手放題なる小言をいひ、また非評もいはれたりき。然はあれ、件の翁達にお説の様なる完全なる稗史を著てよと乞ひたらんには、予には不能と逡巡して、稗史は著て頭を搔べし。是他なし、小説の才と小説の眼と相異なるが爲なるのみ。眼ある者必ず才あるにあらず、才ある者未だ必ずしも眼あらざるなり。予最近『小説神髓』と云る書を著して大風呂敷をひろげぬ。今本篇を綴るにあたりて、理論の半分をも實際にはほと／＼行ひ得ざるからに、江湖に對して我ながらお恥しき次第になん。但し全篇の趣向の如きは、専ら傍觀の心得にて寫眞を旨としてものせしから、勸懲主眼の方々には或はお氣に入らざるべし。予は敢て此書の中より模範となるべき人物をは求めたまへと乞ふにあらず。他の行見て我風なほし、前の人車の覆るを見て降坂なら降車たまへと暗に讀者に乞ふのみなり。作者は勸懲を主とせざれども、此を訓誨の料にすると此を獎誡の資にするとは、讀者輩の心にあり。餘は味ひいと美き一種の食物に外ならねど、用ひやうにて孝行息子が親を養ふ良藥にもなり、盜賊が竊盜のすてきな材料にもなりしと聞く。作者

は血大の眼を開きて學生社界の是非を批評し、此書の中に納められ、讀者輩は地球大の智慧の袋の口を開きて是非曲直を分別して、陋劣を去り、高尚きを取る實際の用に供へたまはば、美術の名ありて微術といふべき予が未熟なる稗史の中にも、人の氣格を高うすてふ自然の效用のなからずやは。あなかしこ、心して讀ませたまへ。

十八年の五月といふ月、漸々に散りてゆく庭前の  
八重櫻に落殘ろ月の下に。

春のやおぼろしるす

第一回 鐵石の勉強心も變るならひの飛鳥山に

物いふ花を見る書生の運動會

きま／＼に移れば變る浮世かな。幕府さかえし時勢には、武士のみ時に大江戸の、都もいつか東京と、名もあらたまの年毎に、開けゆく世の餘澤なれや。貴賤上下の差別もなく、才あるものは用ひられ、名を擧げ身さへたちまちに、黒塗馬車にのり賣の、息子も鬚を貯ふれば、何の小路といかめしき、名前ながらに大通路を、走る公家衆の車夫あり。榮枯盛衰い／＼に、定めなき世も智慧あれば、どうか生活はたつか弓、春めくあれば霜枯の、不景氣に泣く商人あり。十人集れば十色なる。心づくしや陸奥人も、慾あればこそ都路へ、榮利もとめて集ひ來る、富も才智も輻湊の、大都宮とて四方より、入こむ人もきま／＼なる、中にも別て數多きは、人力車夫と學生なり。おの／＼其數六萬とは、七年以前の推測計算方。今はそれにも越えたるべし。到る處に車夫あり、赴く所に學生あり。彼處に下宿所の招牌あれば、此方に人力屋の行燈あり。横町に英學の私塾あれば、十字街に客待の人車あり。失敬の挨拶は、ごつさいの掛聲に和し、日和下駄の痕は、人車の轍にまじはる。實にすさまじき書生の流行、またおそろしき車の繁昌。これ併ながら腕づくにて、金も名譽も意の如くに得らるゝからの奮發出精、まことに芽出たきことなれども、若し此數萬の書生輩が、皆大學者となりたらむには、廣くもあらぬ日本國は、學者で鼻をつくなるべく、又人力夫がどれども、しこたま顧客を得たらむには、我緊要なる生産資本も、無爲に半額は費えつべし。されども乗る客

少くして、手を空うする不得錢多く、また郷關をたちでる折學もし成らずば死すともなど、いうた其口で藤八五門、うつて變つた身持放埒、卒業するもの稀なるから、此容體にて續かむには、尙百年や二百年は、途中で學者にあひたしこ、額合せする心配なく、先安心とはいふものから、其當人の身に取ては、遺憾千萬残念至極、國家の爲にはあつたらしき、御損耗とぞ思はれける。斯く書生輩が志を、得遂げざるには故あれども、其原因の關係鹽梅、頗る隱妙不可思議にて、皆一樣とはいふ可からず。むかし氣質のチョン播連中、若しくは地方の親達などが、曾ておもひ寄らない幕、其隱密なる魂膽をば、寫しだせる物語も、それとはいはず語らずして、讀む人々に悟らしむる、覆車の誠、因果の關係、善きも惡きもあからさまに、作者が自儘の考案もて、いはぬが花か、讀む人が自得るも花歟、へ花をいでて松にしみこむ霞かな、其春霞たちそめて、景色と／＼のふ飛鳥山、山も麓も一面に、花と人にと埋るゝ、四月なかばの賑ひは、上下貴賤おしなべて、共に樂しむ昇平世の、めでたきしるし著き。

毎度ありがたうお靜にいらっしやいまし、の愛敬を背にうけて、扇屋の店をたちいづるは、男女七人の上等客。微醉機嫌の千鳥足にて、先に立たる一個の客は、此一團の檀那と見え、素人眼の鑑定では、さる銀行の取締敷、さらずは米屋町邊かと、思はるゝ打扮。米澤の羽織に、ぢみな琉球紬の薄綿入、水縷の帽子を肩深にいたゞきたるは、時節柄少し暑さうなり。年頃は四十三四。金時計の鍵を胸の邊に、散々と計り見せたるは、昔床しき通人なるべし。今一個は、年の頃三十五六。これも銀行

の役員ならずば、山の字のつく商人なるべし。粧服も相應に立派なれども、前の檀那には、二三目おいた口振なり。残る一個は、年の頃二十六七の好男子、官員とも見え、商人ともつかぬ言語恰好、素人の鑑定では代言人歟とおもはれたり。時ならぬ白チリの襟巻に、獵虎の帽子、黒七子の紋付羽織は、少々柔弱すぎた粧服なり。殊に南部の薄綿とは、ちと受かぬ、どわるくはいへど、中肉にして身幹高く、色しろく鼻筋とほり、俳優でいはば松島屋の顔へ、チイ高の眼を、嵌込んだといふ顔容なり。まづ／＼午前の好男子なれども、兎角氣取たがる癖あるのみか、辯舌があまり爽快ならねば、たゞ何となく甘ったるく聞えて、運がわるいと、ときときには、いけ可憐よの御託宣に、縁がありさうなる人物なり。婦人二個は數寄屋町歟、新橋あたりの藝妓と見え、一個は年頃二十五六、一個はやう／＼十七八。いづれも頗る別製なれども、若きは殊更曲者にて、尙赤襟の色さめぬ、新妓なりとは見えながらも、客をそらさぬ如才なき、花の巷の尤物とは、其舉動にも知られたり。其容姿はいかにといふに、瘦肉にして背も低からず、色はくつきりと白うして鼻筋通り、眼はちとはかり過鋭あれど、笑ふところに愛嬌あり、紅は剝けたれども紅なる脣といひ、眉根といひ、故人となりたる田の太夫の舞臺顔に髣髴たり。さればどこやら愁ひ顔に、見らるゝ廉もなきにはあらねど、笑ふ面に愛敬あるから、結句雙方相照して趣をなす變化の妙あり。これらは所謂統一と、變化とを併せ得たる、有旨趣的美貌ぞとは、とんだ書生風の妄評にて、世間に通ぜぬ陳腐漢にこそ。藝妓の後邊に引續きし二子装の二個の男は、問はでもしるき箱夫にして、餘計な花見のお

荷物ぞと、腹でお客が眩くとは、作者が岡目の評判なりかし。さる程に件の一團は、やをら扇屋をたちいでつゝ、飛鳥橋をば打渡りつ、丘の麓へ來りし時、例の檀那はたちどまりて、若き男を見かへりつゝ、「吉住さん御覽なさい。なんと絶景ぢやないかね。今から直に歸館とは、ちと残りをしい次第だから、どうせ車夫の待せついでだ、あの葎簾張のあたりへいつて、更に一喫煙しようぢやないか。」其實に夕陽に映ずる景色は、又格別と言はざるを得ず、園田さんいかにです。お伴をしようぢやありませんか。」園賛成々々、大賛成。幸ひ花見連も、餘程散じた様子だ。一番ずつと若返つて、鬼ごっこではじめようか。どうだ。小年も田の次も、仲間に這入んな。運動になつていゝぜ。」年「オホ、いかなこつても、此人中で、妾のやうなお婆アさんが。」園「へん、いやに老こんだナ。田の次はどうだ。」田姉さんがやらなけりやア、妾だつて否ですワ。男三人に女一人では、どうせ叶やアしませんもの。」吉「オイ、田のちゃん。行るべし。」僕が尻押をしてやるから、且は（妙なところへ六かしい言葉をつかふくせあり）いま鬼ごっこをしておくと、お座席で轉ばない稽古になるよ。」田「アラ、又あんな口の悪いことを、お言ひなさるよ。妾は厭よ、吉住さんの尻押は、當にならなから。」園「さうとも／＼呑込だぜ。尻の押かたが違つて居るから。」年「オホ、いゝ、眞成にさうですよ。吉住さんは平生うまい口さきで以て、處々方々の藝者やおいらんを……」吉「オット大變。大層風向がわるくなつたぞ。オイ梅公（箱夫の名なり）助け船引。」梅「へ、いゝ、いゝ、今日は、今日は大層うけだちで御座いますね。」吉「そりやア其咎ヨ。三國同盟で攻寄るんだから僕一人では敵

し難しサ。」年「あんまり敵しがたい方でもありますまいヨ。甲  
 樓乙樓と喰ちらかしをなさる癖に。」吉「オヤ喰ちらかしする  
 は。」年「いひますよ角海老の……」吉「まあったく。いふべ  
 らずく。」吉「アハ、ハ、ハ、ハ、吉住さん頻に敗北の様子だね。」  
 舊兎角お胸に弱身が有ましては、お達者なお口でも叶ひま  
 せんものと見えます。へ、へ、へ、吉「なんだ此野郎、汝まで  
 僕をいぢめるな。覺えて居ろ。」ト箱夫を撃たうとする。箱夫は  
 笑ひながら逃出す。吉「サアく兎も角もあちらへ参りませう。  
 アラ御覽なさいヨ。三芳さんがたった一個、いつの間にか、茶  
 屋に腰をかけていらっしやるヨ。」年「ほんたうにネエ。」トい  
 ひながら、箱夫の方に向ひ、年「金どん(箱夫の名なり)おまへはネ、梅  
 どんと一所にあちらへいつてネ、もう直にお歸になるから、用  
 意をしてと車夫にさういつてお呉れナ。」金「へい、畏りました。」  
 ト麓の方へゆく。吉「サアく、まゐりませう。」ト二人の  
 聽者は園田と吉住を急がしつゝ、言争ひながら登りゆく。  
 咲亂れたる櫻の木蔭に、建連れたる葎簾張も、ゆふぐれつぐる  
 群鳥と、共に散りゆく花見客。休らふ人も漸々に、稀なる程の眺  
 こそ、また一層ぞと打つぶやく、しづ心ある風流男あれば、あ  
 たりかまはぬ高吟放歌、相撲綱引鬼ごっこ、飲みつ食ひつ此時  
 まで、興に乗じて暮初る、春日わすれし一團あり。人數およそ  
 十人あまり、皆十二分に酔とれたる、貌に斜陽の映そふれば、  
 さるに似たれど去りかねて、臥轉ぶ人、扶くる人、共によろめ  
 く千鳥足、あしたの課業の邪魔になる、起たまへとの一言にて、  
 いよく書生の花見ぞとは、いと明にぞ知られたる。

此一仲間は、さる私塾の大運動會の、居残と見えて、彼方に

は、空虚になつた薙被褥の記念碑あり、此方には、竹皮包の骸  
 が、杉箸と共に散亂たり。酒を餘りに嗜まぬ者や、深く沈醉さ  
 る書生輩は、おほかた歸りさりし跡と見えたり。其中に一個の  
 書生あり、しひて酒をば飲まされたる其苦しさにや堪へざりけ  
 ん、遙か離れし古木の根へ、臥仆れしまゝ前後もしらず、此時  
 までも熟眠せしが、春とはいへどさすがにも、黄昏ぎはの風寒  
 み、どや／＼歸る足音の、耳に入りてや起あがる、其容姿はい  
 かにといふに、年の頃は二十一、二、瘦肉にして中背、色は白け  
 れども、麗やかならねば、まづ青白いといふ、貌色なるべし。  
 鼻高く眼清しく、口元もまた尋常にて、頗る上品なる容貌なれ  
 ども、頬の少しく凹たる嚙梅、髪に癖ある様子などは、神經  
 質の人物らしく、俗に所謂苦勞性ぞと、傍で見るさへ笑止らし  
 く、其粧服はいかにといふに、此日は日曜日の事にてもあり、  
 且は櫻見の事なるから、貯の晴衣裳を、着用したりと見ゆる  
 ものから、衣服は屑絲銘線の薄綿入、たしかに親父からの被  
 もの、近日洗張をしたりと見えて、襟肩もまだ無汚なり。鼠色  
 になつた綿縮緬の尻子帶を、裾から絲が下りさうな嘉平の古袴  
 で隠した心配、これも苦勞性のしるしと思はる。羽織は絲織の  
 むかしもの、母親の上被を仕立直したものか、其證據には裾の  
 方ばかり、大層痛みたるけしきなり。其服裝をもて考ふれば、  
 さまで良家の子息にもあらねど、さりとて地方とも思はれねば、  
 府下のチイ官吏の子息でもあらん歟。とにかく女親のなき人と  
 は、袴の裾から推測した、作者が傍觀の獨斷なり。

去程に件の書生は、驚き覺めつゝ、四下を見れば、人も漸く散  
 り行きて、おのが仲間の人々さへ、みな歸り去りし有様ゆゑ、

驚きながらも身づくろひして、麓の方へと行かむとする。背後の方よりあわたししく、走り來れる一個の人あり、避くる間なく衝當りつ。〇「アラ御免なさいヨ。眞平御免なさいましヨ。」といふは女の聲なるゆゑ、驚きながらもふりかへる、書生の顔見て彼方も吃驚。玄オヤ貴君は阿兄<sup>アケイ</sup>ちゃんアありませんか。書エ。お芳さんか。寔に久しぶりだネエ。」玄ほんたうに久調でございましたネエ。何もお異りはありません歟。父上はお健康でいらつしやいますか。先々月一寸お目に掛つた計りですから、今月是非參らうと思つて居ながら、父上の命令<sup>めいれい</sup>つたこともあり、ますもんだから、ツイく。」書わたしはまた一昨年おまへに別れたツきり、いつもく掛違つて、おなじ東京に居りながら。」玄お目にかゝることが出来ませんもんでしたから、尙更お目にかゝりたくつて。」書僕<sup>けい</sup>（といひか）わたしだつて逢ひたくつて。然し大層に變つたネエ。不意に逢つたら見違へる位だよ。」トいひながら、つくぐと見る。玄ほんたうに氣恥かしくつてなりませんワ。」と話談<sup>わだん</sup>半へバタくと、かけて來るは以前の吉住。後れてはせくる藝者の小年が、それとさとして迫すがりつ。年「吉住さん。ちょいと吉住さん引。何ですネエ。お待ちさいよ。貴方があんまり烈しく、おっかけなさるもんだから、御覽なさいよ、田の次さんが、餘所のお方に衝當つて、お訛をして居るぢやア有ませんか。そんなに田のちゃんに挑<sup>しか</sup>ふと、角海老がコレですよ。」ト指で角をこさへて見せる。吉なんだ。衝當つたから理窟をいつたと。かまふものか、書生奴が何をいやアがる。僕がいつて掛合つてやらう。」ト行かゝるを袖引とめ、年「アレサ先で理窟はいやアしないが、訛るのは當然でさ

アネ。」と争つて居る聲が聞える故、田兄さん。いろ／＼うけたまはりたい事も、お話し申したい事もありますけれど、今日はお客と一所ですから、お名残惜いけれども……」書サアく。かまはないで彼方へお出よ。いづれまた其内に。」トいひながら、残をしさうな顔附。田の次も去りかねて、田兄さん。いろ／＼久振でお話がしたうございますから、あのう……」トいひかけしが小聲にて、田「どうぞ妾を、一度呼んで下さいな。」書エ、呼とは。」書あれさ、茶屋へ呼んで下さいな。一年に一度や二度、兄さんにお目に懸つたからつて、お父上がお叱もなさるまいから、内々で呼んで下さいよ。貴方も御修行中ですから、何でせうから、あの、何は、妾が如何ともしませうから。」トいふ折園田の聲として、田の次くと呼立られ、田「ハイく。只今まありますヨ。……エ、エ。兄さん屹度ですヨ。」書あ。」トいつたきり、恍惚<sup>うろたへ</sup>として居る。田「さやうなれば。」トいひすて、田の次は彼方へ走りゆく。其後影つれなくと、打目護居る此方の書生を、田の次が常顧のいろ客かと、邪推なしたる以前の吉住、幾度となくふりかへりて、睨む眼元におのづから、嫉妬の氣色のあらはるゝを、さては然かとさすがにも、見てとる書生もたちまちに、面色かへてぞうち見やる。彼方と此方の睨競、墓と蛇とが挑みあふ、其元初にも似たりけり。斯とも知ぬ三芳と園田。三「オイく吉住さん。サア歸るべしく。」田先生、もう鬼ごつこも終局にしやせう。何をして居るんだ。サア行くべしく。」トせきたてられて餘儀もなく、心残して麓へと、下る吉住、引添ふ藝者、見送る書生、見かへる田の次、目にかよはせる相互の眞情、いと切なりとは見えながら、戀とは



見えず、戀ならぬ、中とも見えぬ兩人をば、かゝる筋には取別て、ぬけ目ないく小年さへ、小首かしげて不審貌。年「どうも希代だヨ。」田「エ。大姐。何ですとエ。」年「エ。あの何サ。先刻園田さんに戴いた物を何處へが無してしまつたからサ。」此方に尙ほも立つたるまゝ、恍然思案の書生の脊中、ほんと打れて覺えず吃驚。書「オヤ誰かと思つたら須河か。尙君は残つて居るのか。」須「オイ小町田怪しいぞ。あの藝妓を君は知つちよるのか。」ト言はれて覺えず眞赤にせし、顔を笑にまぎらしつゝ、小「なアに僕が知つてゐるもんか。」須「それでも、えらい久しい間、君と談話をしちよつたではないか。」小「エ。あれはなにサ。お客と鬼ごっこかなにかをして居て、誤つて僕に衝當つたので、それで僕にわびて居たのサ。」須「さうかア。それにしては大層ていねいだなア。」小「何が。」須「彼がしばく君の方を、振かへつて見ちよつたからサ。餘ッ程君を愛して居るぞう。」小「アハ、ハ、ハ。馬鹿を言ひたまへ。それはさうと。諸君はもう不殘歸つてしまつたのか。」須「うん。今漸く歸してやつた。泥醉漢が七八人出来をつたから、倉瀬と二人で辛うじて介抱して、不殘車にのせてやつた。もうく幹事は願下だ。あゝ、辛度々々。」小「僕はまた彼處の松の木の下に酔倒れて居たもんだから、前後の事はまるで知らずサ。そりゃア失敬だつたネエ。ちつと手助すればよかつた。」須「ヤ日輪がもう沈むと見えるワイ。去なう去なう。」小「倉瀬は如何したか。」須「麓の茶屋に俟ちよるぢやらう。宮賀が無感覺になりをつたから、それを介抱しちよる筈ぢや。あゝ、僕も酔うたく。あゝ引。酔うてはア、枕すゝ、美人のゝ、膝ア引。醒てはア、握るゝ、天

下のウ、權引」

【作者曰く。須河の言語は如何なる地方の言語なるかと不審をいだく人もあるべし。こは何處の方言と定まりたるものにあらず。書生社會に行はるゝ嚴難なる轉訛方語と思ふべし。蓋し書生中には上方の生にありながら態々土佐方言などを真似る者ありて、一概に何處の方言とも定めがなければなり。】

## 第二回 謹慎の氣の張弓も弛む

不圖だ目に淡路町の矢場あそび

きやうくしき人力車のごっさい、稚兒の足元あぶなく、騒騒しき辻馬車の喇叭、老人は杖や失なはん。晴て風だつ日の土煙には、新購の帽子爲に白く、晏子の御者めく官員も、鼻の上に八字を畫き、結びしばかりの大島田に、埃がかゝるを苦勞にして、西施の髻をまなぶもあり。是筋違の夏げしき。實にや斯くては塵除に、眼鏡の橋も入用歟、とうちつふやける田舎人の、あだ口さへも道理なり。頃しも五月の下濤、はや暮初る誰彼時講武所の横町よりいと急がしげに駆けるは、年頃、十九敷二十あまり、人品のよき書生風、去年の夏買ひしと見ゆる、へこへこになりたる麥藁帽子を、あふのけざまに戴き、風色になりて、袖口のボタンは、悉く脱走したる白襟袴を被たる上へ、午後五時頃ともいふべき、偽薩摩の單衣を被て、小倉の袴の膝のあたり白やかなりて、ひだの形なしになりたるを、裾短かに穿き、日和下駄の、けふ買ひし計と見えたるを、いと荒らかに踏鳴らしつ、風呂敷包を小脇に抱きて、眼鏡橋へとさしかゝる。折しも聖堂の方よりして、急ぎ來れる一個の書生と、出逢がしらに顔見合せ、以前の書生は聲をかけ、書「ヤ須河。君も今歸るの